

安寧な生活へ備え



立春から数えて二百十日の9月1日は、大風が吹きやすいなど昔から農家の厄日とされてきた。列島に大きな被害をもたらし、「昭和の三大台風」と言われる1934(昭和9)年の室戸台風、45(昭和20)年の

枕崎台風、59(昭和34)年の伊勢湾台風はいずれも9月に上陸している。農家が恐れた「大風」とは、昔からこのころに台風がよく来たからだろう。今はこの日は「防災の日」となった。1923年のこの日、関東大震災が発生し、10万人を超える死者・不明者を出した。先人の犠牲を風化させないためこ

の日は全国で防災訓練などが行われ、自然災害への備えを新たにす。今年の「防災の日」も、県の総合防災訓練が三島市と函南町を主会場に行われたのを始め、各市町でも様々な防災訓練が行われた。想定は南海トラフ巨大地震の発生だが、今年は1年後の東京五輪・パラリンピックを視野に訪日外国人の避難対応などが新たな課題として取り組まれた。災害情報収集にはドローンが活用され(藤枝市)、県が開発した総合防災アプリをスマホで見ながら避難する小中学生の姿もあり、かつてのバケツリレーや土嚢積みといった訓練風景は、すっかり様変わりした。



厄よけの天王船流し 静岡市清水区、全日写真・山田康さん撮影

「防災の日」が制定されて59年になるが、それ以前から地域住民の間では暮らしの安寧を願う行事が行われていた。静岡市清水区由比北田の選択無形民俗文化財「天王船流し」は、竹と麦わらで作った船を海に流して住人の厄払いと海上安全を祈願する。同地区に約200年続く伝統行事で、今年も7月13日に行われた。

神仏に祈っても、防災訓練を繰り返しても、自然災害はいつか必ずやって来る。だから、それぞれが身の回りのささいなこと、自分を守るしかない。今夜から、枕元に懐中電灯と履物を置こうか。(前静岡県監査委員・富永久雄)